◎◎◎佳作

黄泉の国の君へ

米津説男
長野県・六四・タクシー運転手

黄泉(よみ)の国の君に初めてお便りを書きます。そちらの住み心地は如何ですか。誠実で誰からも愛された君の事ですから、きっと花が咲き、鳥が囀(さえず)る極楽で素晴らしい仲間に囲まれて楽しく過ごされている事と思います。

こちらでは、今年もまたジングルベルの曲が街に流れ始めました。早いもので君と別れてやがて五年になります。二人の娘を嫁がせ、夫婦共々、ただひたすら穏やかに老いていく事だけを考えていた矢先の君の発病。しかも癌。同じ家で同じ空気を吸い、同じ水を飲んでいながら何故君が。

「神様はなんでこんなに意地悪をするのか」と、あの時はこの世の万物を怨みました。

後添いとして私の許に嫁ぎ、生さぬ仲の二人の子を他人が羨(うらや)む程立派に育て上げた君。「ようし、全財産をかけても治してやる。癌がなんだ。負けてなるものか」。

敢然と自分に言い聞かせ、私は癌に勝負を挑みました。再三の手術、入退院の繰り返しではありましたが、君も懸命に頑張りましたね。退院して家に居る時は、私に負担をかけまいと些細な事にまで心配りをしていた君の姿に何度、涙した事でしょう。

今は一人ぼっちの暮らしですが、最近では自分の歳は努めて数えないようにしています。死にたくなる程、淋しかった時も何度かありましたが、やっと気楽さをエンジョイ出来るようにもなりました。残された人生を誰よりも自分に強く、誰よりも明るく生きて行くつもりですが、いつの日かそちらに旅立った時は地獄に落ちないよう私の手をしっかりと掴まえて極楽に引っぱって下さい。君のいる所が私のいる所でありたいし、再び君と一緒に夢を見たいものです。

筆不精者が取り止めもない事を書きましたが許して下さい。夜も大分更けて来ましたのでこの辺で筆を置きますが、また会いたいから「さようなら」は言いません。

お元気で。